

会議録(要旨)

会議名等	令和6年度第1回地域自立支援協議会 全体会議		文責	障がい福祉室
日程	令和6年6月24日（月） 午後2時から午後4時30分まで	場所	メイシアター集会室	
出席者	原田委員、大西委員、細川委員、伊藤委員、辻委員、西岡委員、 内藤委員、矢田委員、河野委員、大久保委員、片田委員、吉池委員、 吉村委員、林委員、脇谷委員、荒木委員、小林委員、平井委員			

1. 配布資料の確認

2. 開会挨拶

3. 委員紹介
委員定数 25 名のうち、会場 18 名の委員が出席。半数以上の委員が出席のため、吹田市地域自立支援協議会設置要領第 6 条第 3 項の規定により、本会は成立。

4. 傍聴者
会場傍聴者：1 名、オンライン傍聴者 4 名

5. 令和 5 年度吹田市地域自立支援協議会地域会議取組状況
「(資料 1) 令和 5 年度吹田市地域自立支援協議会地域会議取組状況」参照。
令和 5 年度の地域会議取組状況について報告。

○意見・質問
豊津・江坂・南吹田の取組について、2 年間の事例検討からまだ続く母子支援の課題があるとのことだが、多機関が関わったり、子どもの成長に合わせて支援機関窓口が変わるという点で、相談支援の立場から言うと、限られた地域でなく子ども分野全体を検討する部会があれば顔が見える関係づくりの検討がより進むのではないかと思います。

6. 障がい者虐待防止に関する意見交換振返り報告・提案
「(資料 2) 障がい者虐待防止に関する意見交換振返り報告・提案」参照。
令和 5 年度第 2 回全体会議で行った障がい者虐待防止に関する意見交換において、見えてきた課題等を報告した。地域における虐待防止や早期発見・対応に向けて、障がい者虐待防止専門部会（仮）の設置検討について提案を行った。

○意見・質問
・相談支援専門員は、通報者や虐待に対する支援者にもなるが、少人数職場では研修を受けた後のフィードバックをする相手がいなかったり、検証したりする場もなく、どう実践すればよいか分からない。法人の枠を超えた、事業者同士で一緒に取り組める研修や委員会があると良い。
・事業所にも委員会を設置することとしている。事業所連絡会内でも議論を行っているが、相談員としての立ち位置や見方が適切なのか考えている。
事業所連絡会の立場として何かできないか。実例をもとに、市と一緒に虐待の検証を行っていきたい。
・専門部会について、通報受理後の対応とは別に委員会を立ち上げるのか。

7. 災害時の障がい者支援に関する意見交換

「(資料 3) 災害時の障がい者支援に関する意見交換」「(資料 4) 能登半島地震 災害状況報告」参照。

輪島市職員から、被災状況や職員の支援状況等について、当事者会会長から、防災ハンドブック作成に向けた取組について報告を受けた。

防災について考える上で、地域のネットワークづくりは重要な取組課題であることから、「平時からの避難準備・地域とのつながり」をテーマにグループワークを行った。

○グループワークで交わされた意見

- ・ 大事なものは、個々の動きを確立していくこと。自分たちが減災するための取組を考えていき、行政がどう支えていくか。
- ・ 地域にどのような障がい者がいるか知っておくと助けやすい。情報の発信・共有が大事。
- ・ 平時から、自分の状況を伝えたくない人をどうするのか。想像することも大切。
- ・ 緊急時に連絡をとるツールも考える必要がある。
- ・ 民生委員は、年 1 回、防災委員と訪問を実施。相談員も個別支援計画を作成するために訪問しているため、一緒に訪問や情報共有ができると良い。
- ・ 地域事情を知ることにより、避難方法やどんな支援者がいるかを知ること大切。避難をあきらめている人にどう応えるか。
- ・ 障がい児の避難方法について考えているが、地域の防災訓練には参加できていない実状がある。障がい者も参加できていないが、地域で一緒に参加することが大切。
- ・ 個別避難計画がより良いものになっていくためには、当事者の参画が必要。当事者目線での避難所の点検や、避難物資への配慮も必要（一律の準備では対応できない）。
- ・ 支援学校においては、地域の人と取組を行っている。通学中でないときに発災すると、どこに避難するのか。近隣の避難所が把握しきれていない。
- ・ 避難所に避難したとしても、精神疾患の人は行動が目立ったり、独語があると処遇困難と捉えられる。日頃からの理解啓発が必要。
- ・ 実際に避難するとなると、地域住民とのつながりが重要だが、地域とのつながりが希薄。自治会への加入率も低下している。
- ・ 身体障がい・難病・人工呼吸器の人も避難所を利用することを考えると、ハード面の課題がある。避難したくてもできない人がいる現状をどうしていくか。
- ・ 日頃から薬を用意しておく必要がある。呼吸器やエアマットは停電すると困る。
- ・ 避難訓練については、地域によって温度差がある。お祭り等の地域行事に参加することにより、障がい者がいることを知ってもらうことが大切。
- ・ 近隣との付き合いがなかなか進まない。避難場所等の情報を高齢者等にどうやって届けるのかが課題。
- ・ 予備薬をもらうことは、実際難しい。
- ・ 65 歳以上になると、高齢者の集いに参加できるようになったという例がある。高齢はネットワークづくりが進んでおり、障がい者も一緒に考えていけないか。
- ・ 個人情報保護を前提にしていれば進まない面があるため、包括的に情報共有できる仕組みについて、予め同意を得る必要がある。
- ・ イベント参加についても、障がい者はなかなか踏み出せない。障がい者も一緒にできるような訓練があれば、参加しやすい。

8. 総括・閉会挨拶

「つながり」というテーマは、すべてのグループに共通していた。

多岐にわたる分野の支援者の集まりは非常に大切であり、様々なチャンネルで発言いただけた。協議会を情報交換の場としてもらうことが、市民の支えになる。

熊本地震の際、当事者団体・支援者等のネットワークが 200 名の生活のサポートにつながった。平時からのつながりがあり、キャンパスを利用できたという点を考えると、今後、大学への提案をしていけたら良いのではないかな。

東日本大震災の際、避難所に多動の中学生がいた。当初は馴染めなかったが、役割を持ってもらえるような働きかけを行った。支援を受けるだけでなく、長所を生かせる関わりをすることで、障がい者も溶け込むことができるのではないかな。支援における工夫を共有することも大切。

【配布資料】

（資料 1）令和 5 年度吹田市地域自立支援協議会地域会議取組状況

（資料 2）障がい者虐待防止に関する意見交換振返り報告・提案

（資料 3）災害時の障がい者支援に関する意見交換

（資料 4）能登半島地震 災害状況報告